

ゴリラの社会に探る人間家族の起源

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)のシリーズ5「人間とその進化の隣人たち」の第2回講演が10月8日、行われた。ゴリラの研究で知られる理学研究科長の山極寿一教授が「ゴリラの社会に探る人間家族の起源」と題して講演し、「家族とは何か」を解き明かした。



山極寿一教授。ゴリラと接してきたせいか、話しぶりもおおらかで、人間社会のしらみを感じさせなかった

●オスが父親になって家族ができた

山極寿一教授は野生のゴリラを観察するために、アフリカの熱帯雨林を繰り返し訪ねている。26歳から28歳にかけては、ルワンダで、朝から晩まで、たったひとり、同じゴリラの群れと過ごした。人間といるよりも密接な時間を持ったという。

今回の講演のテーマは、ゴリラ社会から人間の家族を探ること。山極教授は「哺乳類の子どもは父親がいなくても育つ。子育てをするサルはいるが、父親であり続けるオスはいません。人間の家族はオスが父親になることでできた。家族は人間にしかない」という。

たとえばサルのタマリン。母親が大きな子どもをたくさん産むので、出産後に子育てができない。そ

こでオスが子育てに参加して、子どもを早く成長させるように進化した。「でも、子どもが成長したら、オスは別の群れへ行ってしまうのです」

ゴリラのオスの場合は「遊び」だ。「遊び」を通して子どもと仲良くなり子どもを社会化する。

山極教授は会場にマウンテンゴリラの映像を流した。子どもが父親の背中で元気に遊び、父親はじっとしている。動かないことが遊ばせる秘訣で、ゴリラはその技能に長けているという。

●ゴリラの子育てはバトンタッチ

では、ゴリラの子育てはどのように進むのだろう。

ゴリラの赤ちゃんは2キロ足らずの体重で生まれ、3年間はお乳で育つ。「母親は、お乳以外のものを食べるようになった子どもを抱えて父親の前に行き、座らせませす。そしてそうっと離れるのです」

子どもは最初、母親の姿が見えなくて不安になる。だが、父親のそばできょうだいゴリラたちが遊んでいるので、やがて遊びの輪に入り、母親不在でも平気になる。子ども同士がケンカをすれば、父親が仲裁に入る。大きな子どもをいさめ、小さい子をかばう。

子どもたちはやがて父親を信頼し、後を付いて歩く。それでやっと、オスは父親らしくなるという。

「ゴリラは、父親と母親と一緒に子育てをするのではなく、バトンタッチします。乳児期まではお母さん、乳離れした後はお父さん。子どもは5歳ぐらいになると母親が誰かわからなくなるくらい疎遠になる。だから母親は子離れができます」。ゴリラのオスは、メスに子どもを託す相手に選ばれ、子どもに保護者として選ばれて、初めて父親になれるのだ。

では人間はどうか。「妻や子どもからだけでなく、周囲の人から『あなた、この子の父親でしょ』と言われる。それによって父と子の関係が保たれる。逆に言えば、血縁関係でなくても、誰でも父親になれます。父親という役割は人間の最初の文化なんです」と山極教授は指摘した。



ゴリラは人間以外では珍しく、よく「対面」する。あいさつや仲直りなどのためだが、共感能力を高めるという（山極寿一教授提供）



ゴリラのドラミング。威嚇ではなく、自己顕示や遊びの誘いなどのコミュニケーションだという(山極寿一教授提供)

●共同保育と共感

一生の生活史で比べると、人間にはゴリラなど類人猿にない特徴がいくつかある。ゴリラは乳児期こそ3、4年と長いですが、その後すぐに少年期に入り、13歳ぐらいで成年になる。これに対して人間は、約1年の乳児期を過ぎると子ども期が数年あり、続く少年期の後に青年期が来てから成年になる。さらに、繁殖能力を失った後も長生きする。

山極教授は、この生活史の違いに注目する。「人間は、離乳は早く成長は遅い。類人猿のように『遅い離乳と早い成長』がなくなった時点で、共同保育の必要が生じたとみています」

かつて、森から肉食獣がたくさんいるサバンナへ進出した人間の幼児の死亡率は高かった。だから、離乳を早くして母親はすぐに次の子どもを産めるように進化した。その代わりに、父親らが共同で子育てをする。その際、子どもと同じ世界に入るために「共感」する力を身につけたという。山極教授は、音楽的な能力もそのひとつとみる。

「共同で長い時間をかけて子どもを育てるから、家族ができました。そして共感が育った。その共感を利用して複数の家族が集まって共同体ができた。それが人間の社会の根本にあると思います。家族は文化的なものであるばかりでなく、生物学的な理由を伴って進化したものなのです」

●ゴリラも笑う

類人猿の中では、ゴリラの共感能力が高い。弱いゴリラに食べ物を分けるし、人間の子どもの手を助けたことさえあるという。他の動物とも遊べる。山極教授は、ゴリラがフクロウと遊んだりみんなでカメレオンを観察したりしている映像を流して、こう語った。「ゴリラは人間以外で、ほかの動物をペットにできる唯一の動物です。その動物の気持ちになれるからです」



会場から「なぜ類人猿は進化しないのか」と質問が飛んだ。山極教授の答えは「彼らも変化してきたはずですが。でも、酸性の土壌の熱帯雨林にいたので骨が溶けてしまい、化石が残っていないのです」

また、笑い声を出せる動物は類人猿でもゴリラとチンパンジーだけだという。「笑うことは自分が楽しい、という表現で、相手をその楽しさに引き込む力を持っています」

こうした「意外性」と「なるほど感」のある逸話が次々と繰り出され、人間の秘密が解明されてゆく。会場からは「ほう」というため息が漏れ続けていた。

(※原稿及びクレジット未記載の写真は朝日新聞社提供)